海外における初年次教育の動向
―アメリカ・英国・香港の調査から―

矢野 裕俊
（大阪市立大学 大学教育研究センター教授）

はじめに

どの国の大学であっても大衆化が進むとともに、入学者の多様化は避けられない。ユニバーサル段階を迎える我が国の大学でも学生の多様性の増大に伴って初年次教育の重要性が認識されるようになり、すでに様々な取り組みが行われるようになっている。本稿では、我が国の大学の初年次教育のこれからの在り方について考えるために、海外の初年次教育の動向に注目することにするが、取り上げるのは筆者が過去三年間に調査を行ったアメリカ、英国、香港である。記述にあたっては、訪問調査によって得た資料とともに、ウェブにおいて入手したデータに基づいてている。

アメリカの初年次教育は我が国でもその三〇年近くに及ぶ実践と研究の蓄積が知られている。また、英国や香港では我が国と同様、それぞれの大学制度が直面する課題と結びついて、近年にわかに初年次教育への関心が高まってきている。

アメリカの初年次教育・初年次セミナー「大学」

サウスカロライナ大学はアメリカにおいて初年次教育実践の草分けとなった大学である。発端は、一九七二年に同

大学で「大学」（University 101）という名の一年生向けセミナー科目が開設され、正規のカリキュラムの一環として実施されたことに始まる。その背景には、一九六〇年代末にアメリカ国内で活発化したベトナム反戦運動に全米の学生が関わり、大学教育のあり方が問い直される一方、大学の大衆化が急速に進む中で、学生のアカデミックな成功を支援するためには、入学当初に行う教育がきわめて重要だという認識が広がってきたことがあった。

科目「大学」は、おそらくアメリカではもっとも早く行われた初年次セミナーであり、ウェブページによると、現在は三単位の選択科目として提供され、新入学生の八〇％が履修しているという。同大学の初年次教育研究センターの調査によれば、全米の八五％の大学が何らかの初年次セミナーを開講し、五八％の大学がサウスカロライナ大学と類似の内容の初年次セミナーを実施しているという。（"University 101," http://sc.edu/univ101/aboutus/history.html）

初年次教育とはカリキュラムだけでなく、それと並行して行われる教育活動を広く含む概念であるが、カリキュラムに位置づけられる科目としては、これが代表的なものである。この科目は、初年次学生が大学に適応し、学習の過程に対する理解を深め、必要不可欠なアカデミック・スキルを身につけることを目的にした科目である。そこでは、二〇もしくは二五人という少人数の学生を対象に大学教員や専門職スタッフが担当し、多くのクラスでは大学三・四年生のピア・リーダーや大学院生リーダーが協力的に関わる。学生たちが学ぶアカデミック・スキルとは、学習の仕方、ノートの取り方、時間管理の方法、試験の心得などであり、中間・期末だけでなく頻繁に出されるレポート課題や図書館で調べる学習、独自テキストを使った学習によって初年次学生たちは自分のアカデミック・スキルを点検評価し、それを高めていく。

また、この科目では集団がもつ多様性とその中での相互作用によって、キャンパスライフへの適応を図り、批判的思考や意思決定のスキルをも高めることが求められる。学生は自分の価値に気づき、他者のもつ違いを尊重することを学び、倫理的な責任感を育てることが重視される。現在の学習到達目標は、アカデミックな成功を援助する、サウスカロライナ大学を知り自分との結びつきを強める、多様で相互に関連しあった変化する世界において責任ある生活を送れるように学生を準備する、の三つである。この科目を履修した学生は、概して在学中の学業成績がよく、在籍

率も卒業率も高いことが早くから知られている。この科目はアメリカの大学でその後導入されるようになるセミナー形式の科目のモデルとなっていく。現在は、多くの大学が同名の科目もしくは同趣旨の科目を設けている。

ところで、アメリカの大学では、入学してきた学生が大学での学習についていけずに脱落したり、大学への帰属意識がもてずに別の大学へと転校したりするというケースがしばしばみられる。しかし、それによる学生数の減少は授業料収入の減少や予算の削減に直結するため、在籍率の維持向上はアメリカの大学にとって経営上の死活問題でもある。

こうしたセミナーの他にも、たとえば学生による学習コミュニティといって、大学の寮で生活する学生を中心に、教育、ロースクール準備課程、メディカルスクール準備課程、心理学、持続可能な生活、寮生活などといった共通の属性や関心領域に基づいた仲間グループで、同じ授業科目の履修をベースとして定期的に集まって学びあう、学習のための相互支援コミュニティがつくられたりしている。また、ITを活用した学生ポートフォリオの作成、自学自習と学習相談システムの構築、図書館利用教育、上級生が新入生のモデルとなってかかわるメンター制度なども行われている。こうした初年次教育の取り組みは特定の大学種別に固有のものではなく、コミュニティ・カレッジ、リベラルアーツ・カレッジ、小規模州立大学、研究大学など、さまざまな大学種別にわたってみられるものとなっており、それぞれの大学の特性に即して模索・推進されている。

英国での初年次教育への注目

今日の英国の高等教育を方向づけているのは、政府の諮問機関として設けられたデアリング委員会が一九九七年にまとめた報告書「学習社会における高等教育の将来」である。これは国際競争力を高めるための高等教育の役割に関する戦略的な提言ともいえるものであり、高等教育機会の拡大、高等教育への在学率の向上、受益者負担の原則の導入による高等教育財政の改善、世界トップクラスの高等教育制度を目指した高等教育の機能と教育内容の改善、そして高等教育の水準・質の向上を勧告した。

英国の大学における初年次教育への関心は、高等教育に託されたこうした役割期待を背景にして出てきた。かつての中等教育上級課程からAレベル試験を経て入学するというルート以外に、継続教育機関からをはじめ、多様な学習

経験をバックグラウンドとして大学に入ってくるようになった。そのため、学生が中途退学するというケースや、留学生の増大などが新たな問題として浮上してきたという事情もあった。

英国において初年次教育に対してもっとも組織的な取り組みを始めたのはスコットランドであり、その中心になってきたのが高等教育質保証機構（ＱＡＡ）である。この機構は英国の大学及び高等教育機関からの拠金により設立され、高等教育資金交付団体との契約により教育の質の維持・向上のための評価と情報提供を主な活動としている。

同機構のスコットランド支部は二〇〇五年一二月より、大学教育の質向上を図る重点課題の一つとして「初年次」を設定した。委員会で検討されることになったサブテーマは次の三つであった。

① 初年次カリキュラム：英国の高等教育カリキュラムに一般的な科目別プログラムを超えたカリキュラム・デザインがどこまで可能か。

② エンパワメント：学生が自分の学習をコントロールできるように、そして自律的な学習者としてみずから学習資源を利用できるようにする。大学での学習の開始時期に、その後の学習に備えるために、就業能力（employability）や専門性を身につけるために、そして生涯学習に備えるために、自立的な学習者として必要なスキル、能力、知識をもたせる。そのためには、多様で異なる学習経験をもって入学してきている学生の学習を個々の学生に即して行えるように配慮するとともに、移行プロセスの期間を延長することが必要である。

③ 参加（engagement）：これには初年次、自己開発、高等教育生活への学生の参加レベルを向上させるストラテジーの提示などが含まれる。中心となるのは学生相互の仲間関係（メンタリング、ピア・サポート、ピア・チュータリング）の形成であり、初年次に学生の動機付けを高めることを重視する組織文化の醸成である。

エンパワメントという視点から、たとえば学生が自分の学習・教授方法のデザインにかかわることやさらには評価方法にも影響力をもつようなことも模索されるようになった。さらに、初年次教育として、学生を大学につなぎとめるためだけの汎用的スキル科目では不十分であるとの考えが広がり、検討委員会は、生涯学習のための基礎固めとして大学で何が必要か、初年次にはそのために何をどの程度学習することが必要なのか、といった問題に取り組むよう

になった。こうして、実践の焦点が次第に明確になっていったのだが、それは各大学に、初年次への移行と初年次から次への移行、学生同士のピア・サポートの在り方、形成的評価とフィードバックの観点、オンラインのポートフォリオを利用した自己開発計画、自分に合わせた初年次の在り方、学習スキル（とくにアカデミック・ライティング）の導入、初年次のカリキュラム・デザインという七点にわたる検討を求めるものであった。

二〇〇九年の報告書において勧告としてまとめられた課題は次のとおりである。（Quality Enhancement Themes; The First Year Experience Overview of the Enhancement Theme 2006-08: The aims, achievements and challenges, The Quality Assurance Agency for Higher Education 2009）

・初年次のために明確なストラテジーをつくる
・初年次のための施策を強化するために資源を投入する
・初年次教育に関するデータの質を向上させる
・初年次教育の地位を引き上げる
・初年次の総括的な学習到達目標を「アカデミックリテラシー」と定義する

こうした提言を受けて、スコットランドの各大学では初年次教育の取り組みが始まっている。一例を挙げると、スターリング大学では、二〇〇六年から初年次学生の自己開発計画づくりを支援する部門を設け、一部の学科に初年次の学習のためのチューターやアドバイザーを配置する、初年次学生の教育を経験豊富な教員に担当させる、一部学科でピア・メンタリングを試行するなどの他に、専門基礎的な内容や総合的な内容をもった初年次コースの導入の検討、学生寮を生きた学習コミュニティの基地として活用する方法の検討などが行われてきた。

また、エディンバラ美術大学では、さらに前から初年次カリキュラムが開発されてきた。この大学が初年次教育に取り組むようになった背景は、やはり入学してくる学生の多様化であった。二〇〇七年現在では留学生が二〇％程度、継続教育機関からの入学者が全体の一七％程度を占めるほか、中等教育段階で美術を学ばずに入学する学生もいるため、共通の学習経験を前提としたカリキュラムは成り立たなくなり、次のような独自の初年次カリキュラムを実施し始めたのである。

・初年次学習プログラム

美術・デザイン学科の共通コースとして全員に履修させる。これは学科がカバーする領域の全体をひととおり学習

するように考案され、二年次以降に選択する専門の基礎固めとなる。内容は、デッサン基礎、絵画、タペストリー、版画、デザイン&ビジュアルコミュニケーション、彫刻、ビジュアル&カルチュラルスタディズ。

・チューターとの緊密な関係

初年次学習担当部長一名、コーディネータ三名、講師一〇名が初年次学生のチューターを兼務し、作品制作や専門の選択をめぐる学習相談に応じる。

・上級学年の学生によるメンタリング

美術作品の実習などでは、初年次学生が上級学年学生と同じ空間で制作に取り組むことができるように配慮され、学生の間での自主的な学び合いの関係づくりが奨励される。

香港の初年次教育・香港城市大学の一般教育プログラム

香港でも初年次教育への関心はにわかに高まりつつある。現在の三年制から四年制へと大学の在学期間を二〇一二年に延長することが予定されている香港では、新しい四年の学士課程教育の中で、初年次の教育をどのように位置付けるのかが大きな関心事となっている。現在、二年制の中等教育上級課程で学び、Aレベルという科目別の試験を受けて大学へと入学してくるが、期間延長後は、学生は数学、英語、中国語、リベラル・スタディーズを中身とするコアカリキュラムを学んで入学してくることになる。

そこで、たとえば香港城市大学では、卒業要件の一二〇単位以上のうち、九〇単位以上の主専攻科目・副専攻科目・自由選択科目と、三〇単位以上の一般教育科目を修得することが必要とされる。一般教育科目は九単位の「英語」と三単位の「中国文明（歴史と哲学）」を専攻の別なく全学生必修として履修し、残る二一単位を人文系、社会系（社会・社会科学・ビジネス組織）、科学・技術系の三領域で提供される科目を学部の指示で履修することになる。現在すでに、専攻以外の一般教育科目を三単位以上履修することが求められている。

二〇〇九年一一月に定められた一般教育プログラムの学習到達目標は次のとおりである。

・自律的な学習能力を使える

・人文、社会科学、ビジネス、科学・技術の基本的な方法や技法を説明する

・批判的思考のスキルを使える

・情報と数量的データを解釈する

・構造化され、しっかりと組み立てられた、流ちょうな文

章を書く
・効果的なオーラルコミュニケーションスキルを使える
・自文化と少なくとも一つの他文化の重要な特徴及びそれらがグローバルな問題に及ぼす影響について知る
・倫理的で社会的に責任ある行動をたっとぶ

これらの目標を達成することにより、理想とする卒業生像に到るのだが、それは、チームワークが求められる状況で協働するための文化理解、様々な分野で使えるコミュニケーション・言語・数量・ITのスキルの習得、問題解決や新しいアイデアを生むための批判的思考のスキルの習得、グローバル社会の市民として求められる倫理と社会的責任の自覚、生涯学習と就業能力のための積極的姿勢の涵養、と表現される。

一般教育プログラムは初年次教育としての性格をもつものである。「英語」は、情報を提示し、アイデアや考えを明確かつ論理的に表現するための効果的な英語コミュニケーションスキルを書くことと話し聞くことの両面で身に付けること、「中国文明（歴史と哲学）」では現代世界において「自己」の位置を定めるための中国史・哲学の理解を得ることが目指される。この二つは学生の学習スキルとアイデンティティにかかわる科目である。

結び

アメリカの初年次教育では、高校生から大学生への移行、大学初年次から二年次以降への移行、家庭生活から寮・下宿生活への移行など、「移行」を支援することが大事な目標として意識されており、目標がきわめて明確である。授業科目ごとに大量のリーディングが宿題として課せられるアメリカの大学では、それを迅速にすすめるためのスキルの習得が切実な課題となる。したがって、初年次教育で学習するスキルは課題文献の探し方、読み方、内容理解の仕方、ノートの取り方・整理の仕方、レポートの構成の仕方、まとめ方などきわめて具体的で、懇切丁寧である。概して、大学での学業の成功に主眼を置いた初年次教育である

他方、英国スコットランドで目指されている初年次教育は、学習者中心の学習を進めることにより、学生を自立的な学習者に育てるという指向性を強くもっている。それは英国の大学が、生涯学習社会に必要な能力や資質を育てるという役割を期待されているということとも関係している。もちろん「移行」支援という問題意識もあるものの、社会において大学教育が受け持つ役割がより強く意識され

ている。それは香港城市大学の一般教育プログラムにも通じる。また、アメリカの初年次教育にもあてはまるが、学生が相互に学び合う関係づくりが非常に重視されている。

英国、香港での初年次教育の取り組みはごく最近のことであるが、共通の特徴を帯びている。それは、大学を職業生活、市民生活、さらには生涯にわたる生活全般を見据えて必要な力を育てる時期としてとらえ、そのための効果的な学習を始めるプログラムとして初年次教育を位置づけようとしている点である。初年次教育の在り方は、これからの社会において大学の学士課程教育にどのような役割を期待するのか、といった社会の大きな教育的課題と結びつけて考えられているのである。